

⑫ 建昌大夢死去

大正九年以來本校彫刻科塑造部教授として指導にあたつた帝國芸術院会員の建昌大夢は昭和十七年三月二十二日、日暮里渡辺町の自宅で肺気腫のため死去した。前年に門下生とともに直土会を結成したばかりであった。彼は彫刻界の元老として官展に重きをなし、餘技として俳句を能くした風流人でもあつた。告別式は二十五日に滝野川区田端町興楽寺で行われた。

⑬ 岡田三郎助記念像

昭和十七年四月二十九日、校庭で故岡田三郎助記念像除幕式が行われた。制作にあたって中心的役割を果たしたのは田辺至（浮彫り制作者）と朝倉文夫（監修者）であつた。同十六年一月二十六日付『東京朝日新聞』には建設計画段階の状況が次のように報じられている。

恩師のレリーフ

美校内に岡田三郎助畫伯の像 美術界總動員で計畫

上野の東京美術學校々庭には同校と深い関係のあつた物故教授の胸像が建てられてゐる、丁度明治、大正の美術界を代表する人、我が現代美術育ての親を網羅してゐるかの様に岡倉天心、高村光雲、竹内久一、石川光明、大村青崖^{〔西〕}、黒田清輝、橋本雅邦、寺崎廣業、川端玉章、久米桂一郎、海野美盛、海野勝珉諸大家在りし日の姿が青年美術家をじつと見つめてゐる、この胸像群の中へ去る昭和十四年世を去つた故岡田三郎助畫伯の像が近く門弟、

関係者の熱意で建てられることになり、然も、洋畫界の大先輩の記念像は洋畫家の手で」と云ふ全く新しい試みの下に計畫が進められてゐる

故岡田畫伯と美校との關係は、明治二十九年以來世を去るまで四十數年間の教鞭生活でも知れる極めて深いもの、その間現洋畫壇に名を列らねる畫家達の大多數は岡田畫伯の警咳に接してゐる、そこでこの記念像建設計畫も藤島武二、和田英作、和田三造、中澤弘光、南薫造、辻永、田邊至、太田三郎、中村研一、北蓮藏諸畫伯を初め十數氏の實行委員以下發企人は百數十氏に上る美術界總動員である

かくて來る四月、美校内に事務所を置いて愈建設に着手して本年内に除幕式を行ふ豫定だが、時節柄多量の銅を要する胸像は止めて故畫伯も好んでゐた上、時には自ら制作もした薄肉彫^{レリフ}とし、實行委員中の一アトリエを中心にして制作、更に深い關係のあつた洋畫家達が全員協力して、一指宛でも恩師の像を作る手となつて完成させたいとの意見が有力になつて來たので、美術界初めての美しい試みが岡田畫伯の記念像を完成させるのではないかと云はれてゐる

除幕式当日、建設委員会總代辻永から本校へ右記念像が寄贈された。

⑭ 西田正秋の海外出張

昭和十七年夏、助教授西田正秋は中華民國その他への出張を願ひ